

体験

しょう

発見

しょう

制作

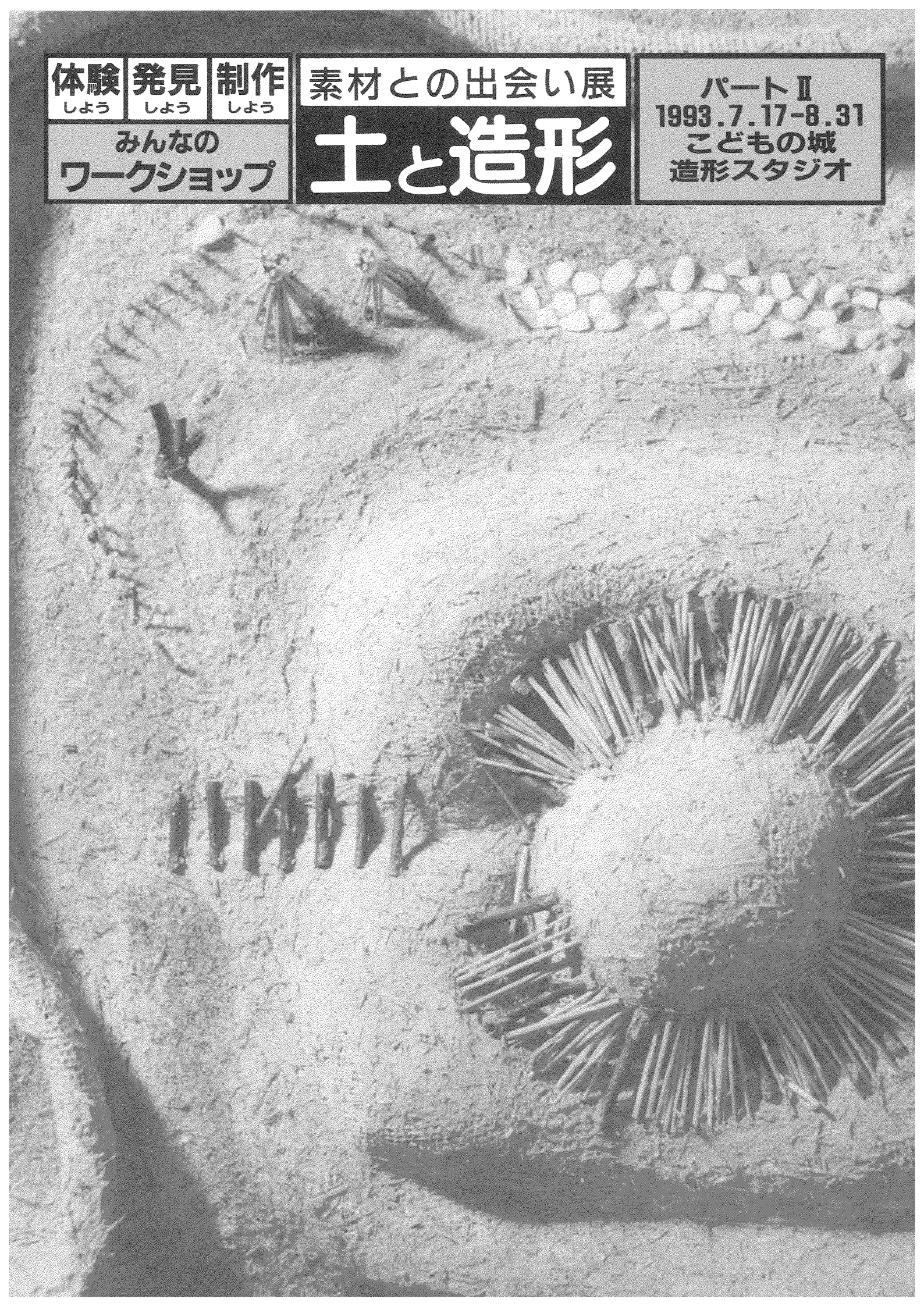
しょう

素材との出会い展

# 土と造形

パートⅡ  
1993.7.17-8.31  
こどもの城  
造形スタジオ

みんなの  
ワークショップ



夏休み特別プログラム  
素材との出会い展 〈土と造形〜パートⅡ〉  
1993.7.17-8.31



はじめに

今年も《素材との出会い展「土と造形」》のワークショップを開催します。昨年は、世界各地の“やきもの”の技術をふまえながら土の可塑性に主眼をおいて、型にはまった器作りではない、粘土による造形のさまざまな試みを行いました。

今回は、昨年の内容に加え、泥状の土、生の土、乾いた土——いろいろな様態の土にまで視点を広げ、それぞれの土が持つ特性を生かして、素材としての〈土〉の可能性を子どもたちが実感できるワークショップ環境を設定しています。

コンクリートに覆われた現代の都市生活の中では、土を目にすることも、触れることも少なくなりました。時にはその存在すら忘れがちです。ちょっと昔までは、日本人の生活空間の中に、土壁、土間、かまど、瓦葺きの屋根など、さまざまな形で土が使われていました。土が身近な存在だったのです。そして、街角の建築現場などで土を扱う職人さんの、生き生きとした仕事ぶりを見ることができたものです。その土は、陶磁器とは異なった形で私たちの生活にかかわっている土です。子どもと土と造形のプログラムの中では、このような土についても目を向けていくべきだと考えました。土と水のバランスやその中に混ぜるものの種類や性質により、土という素材が私たちの想像を越えた可能性をあらわにするのです。

このワークショップの展示・体験・制作の活動のなかで、人類が共に生活してきた〈土〉の本来の姿や魅力に、子どもたちが一歩でも近づくきっかけができることを願っています。

本企画の実施にあたり、下記の方々のご協力を得たことに深く感謝いたします。とくに左官職人の榎本新吉さんには、展示・体験コーナー「手でみる土かべ」の制作のほか、各地から採取された土の標本の提供や、生土によるプログラム作成のための数々のアドバイスをいただきました。一粒の土も一滴の水も粗末には扱わない、その段取りのよい仕事ぶりは、私たちが忘れかけていた、もの作りの姿勢を再確認させてくれました。

1993年7月 こどもの城造形事業部

発行 こどもの城 1993年7月17日  
編集 造形事業部 TEL 03(3797)5662  
住所 〒150 東京都渋谷区神宮前5-53-1  
印刷 (有)博英社 TEL 03(3253)4010

榎本 新吉 氏 (左官職人) 株式会社 竹尾  
小林 澄夫 氏 (月間「左官教室」) 山田ダンボール株式会社  
田中 清隆 氏 (造形作家) リンテック株式会社  
湯浅 祥平 氏 (陶芸作家)

## ワークショップ

樹木に年輪が、そして人間の顔に皺が刻まれているように、〈土〉にもさまざまな表情がある。山や畑を削る工事現場や大規模な建築現場に出会った時、生々しい〈土〉の横顔に興味をそそられた人は少なくないはずである。そこには、黒っぽい土、明るい褐色、暗い褐色、そして、小石や岩なども混じった複雑な色の世界がある。そして、それらは幾重にも重なりあい、〈土〉のうねりとなっている。それは、長い歴史の中で気候や動植物などが作り上げてきた地球の年輪ではないだろうか。

〈土〉の様態は、水分の過不足によって様々に変わる。水分を多く含むとドロドロした流動体になり、程よく混ざると可塑性の粘土となる。そして、乾燥すると石のように硬い固体となり、火を通すことによってさらに変質していく。遠い昔から人間は、〈土〉と相対し考察しさまざまなことを学んできた。絶えず変化している〈土〉の動的平衡のサイクルのひとつに、人間は入り込んできたのである。それは、農民、建築家、陶芸家、左官職人たちがその深い知識と経験で〈土〉を統御してきている歴史を見れば明らかではないだろうか。

今年の「土と造形パートI」では、〈土〉の持つ特質のひとつである「他の素材には見られない特異な可塑性」を生かしたワークショップを展開した。つまり、適度な水分を含んだ粘土の状態であればできない形態を陶芸の手法を使いながら、器を作らないで器作りへ誘う〈土〉の造形を模索した。

〈土〉の造形としての器などは、私たちの生活に密着したものである。しかし、ひとたび焼き物や陶芸の世界を離れて〈土〉をみると、それはとても不可思議な物質でもある。「土と造形パートII」では、可塑性のみを追求せず「さまざまな様態の土」が持つそれぞれの特質を生かしながら、造形素材としての〈土〉だけでなく、〈土〉という素材が持っている私たち人間との関わりを、造形活動を通して体験するためのワークショップを展開する。

造形スタジオでの活動は、一部のプログラムを除いて、焼成を前提にしないものとなる。焼き物というものは、まず焼き方を決定し、それによって粘土や作るための方法が変わってくる。しかし、ここでは、素材としての〈土〉を身近に感じ、〈土〉のさまざまな様態を知るために、適切な道具と方法を使用して、制作活動を行うことにした。例えば、そのひとつとして造形スタジオでは、出来る限り多くの粘土を子供たちに与えることにしている。粘土の量感が教えてくれることは少なくない。少量の粘土で何かを作るとき、長く粘土を手で持ちすぎると、体温で粘土は水分を失い、ひび割れ、可塑性が減少していく。可塑性の減少した粘土で子どもが何かを作ること





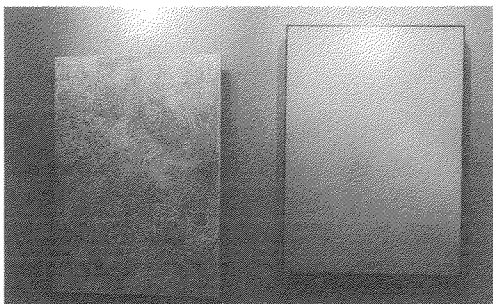
は、大変困難なことである。しかし、大きな固まりの粘土は水分を多く含んでおり、可塑性を長く保ってくれる。だから、小さな子どもにとって、一抱えほどもある粘土と格闘することは、貴重な体験となってくる。少量の粘土で指先だけを使って何かを作る時より、掌全体、体全体を使うことで、子どもたちは、〈土〉の特性をより多く、深く知ることが出来るはずである。造形スタジオでは、出来上がった作品の出来、不出来ではなく、〈土〉と対した時間こそが大事だと考えている。そこで覚えた〈土〉の方法は、繰り返し〈土〉と対していくことで、焼き物を含んだ造形の世界を広げてくれる。そして、さらに〈土〉をこね、延ばし、丸め、叩き、引っ掻き、型押しし、曲げ、塗り付けるという行為は、子どもたちが自分の足元にある大地を感じとることなのであり、人間としての叡知を育むことなのである。子どもたちが〈土〉を通じて得る経験は、陶芸などの世界を知ることだけではない。生命の根源をなすともいえる〈土〉を多角的に捉えなおし、子どもたちが改めて〈土〉という固体と出会うことこそ大切なのである。流動体、可塑性、固体と変化する〈土〉を手を通して体験するという事は、まさに私たちの住む地球を知ることではないだろうか。



## 1. 展示

素材との出会い展「土と造形パートII」では、流動体、可塑性、固体、火をとおして変容した土、それぞれの様態の土の持つ特色が生かされるような展示を企図した。

円形劇場から造形スタジオ入口へのなだらかな外壁には、子どもたちの作った「クレイ・プリント」、「カリカリ・アート」の作品パネルが展示してある。土の持つ可塑性を生かした版画「クレイ・プリント」の色にひきつけられ、これが粘土を使った版画であることを知って、驚く子どもは少なくない。それらは、子どもたちのつけた絵の具と、押し当てる力の違いで、粘土の板に採集されたさまざまな形が、二次元の紙の上に三次元の空間を生み出しているようだ。さらに、土壁に釘で落書きしたようなパネルと、まるで〈3Dマジック〉のように色鮮やかな二枚一組のパネル「カリカリ・アート」がある。乾燥した土のパネルに、釘で引っ掻き描いた虫の絵の上から、数色のクレヨンでフロタージュした作品である。そして、スロープを降りてきた子どもたちは、スタジオ入口に設置された巨大なオブジェの持つ土の量感に圧倒される。高さ約2.5mの中空から垂れ下がる鍾乳石のような三本の逆円錐。真ん中の一本を辿ると、それに続く大地のようなうねりと、すくと塔のように立つ柱。オブジェの回りに置かれた双眼鏡を覗くと、猿から人間に進化する様子、狩猟をする原始人たち、崩壊した神殿の柱、点在する化石や骨、無重

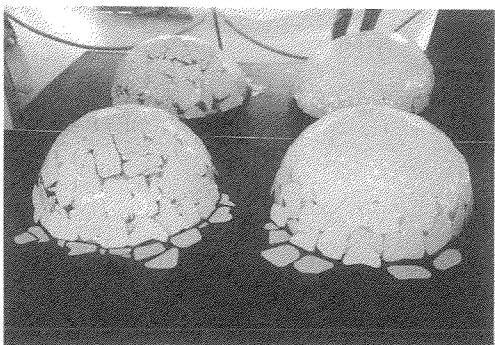
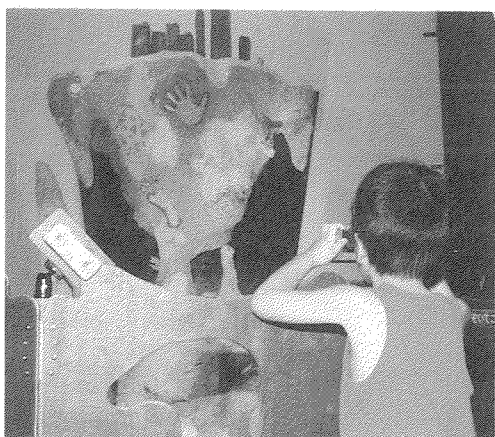
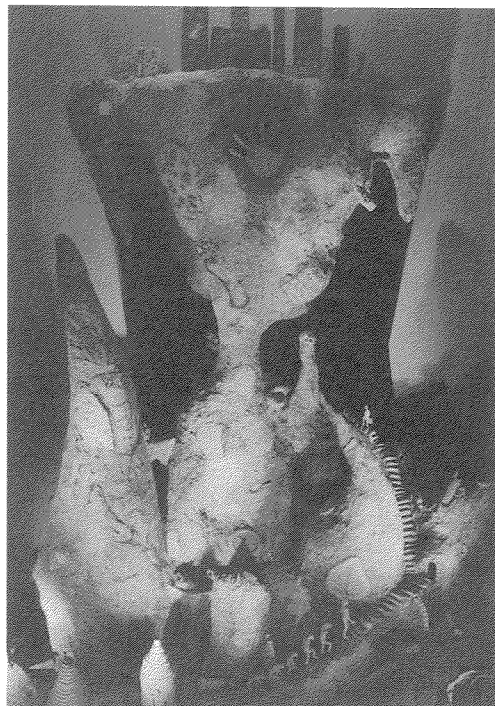


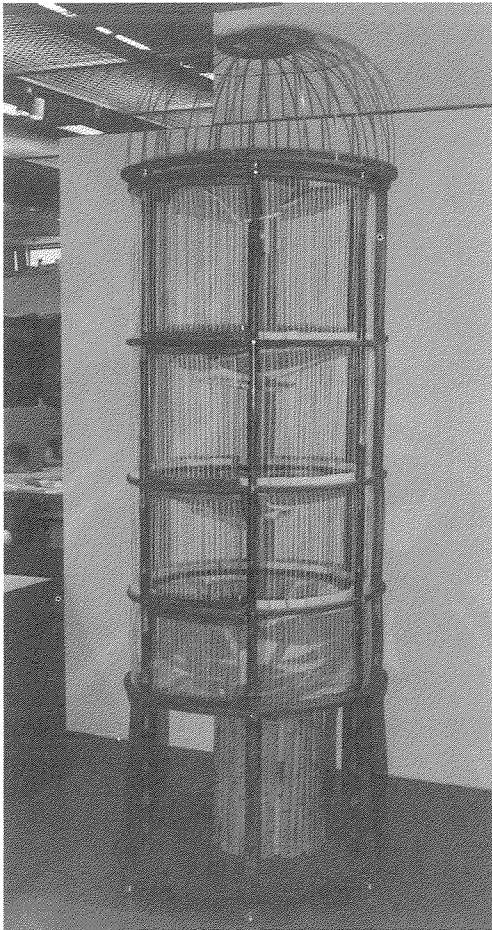
力の月の上を歩いているようにさかさまに立つ宇宙飛行士、何時の時を刻んでいるのか化石のようになった時計、そして、黒く崩れ欠けたビル群などが迫ってくる。この巨大なオブジェは、太古の昔から土と人間との関係を辿って見せる「土のタイムトラベル」なのである。双眼鏡で土を拡大して見ると、肉眼では気付かなかった土のミクロの世界が見えてくる。これらは、生の土に藁や砂を混ぜたものをもとに作られている。また、点在する化石や人などは土を焼き縮めたものである。

造形スタジオに入ると、さまざまな色と技法で塗られた24枚の土壁のパネルがある。一枚45センチ角のパネルに塗り、固められた土の標本が上下二段に展示されている。同じ大きさであるため、微妙なテクスチャーの違いや、色合いも一層きわだった特長を見せている。土壁のパネルは、焼き物とは異なった土の使い方を私たちに教えてくれる。これらは、子どもたちがそのパネルを手で辿り、土壁の持つあたたかさ、つめたさ、荒さ、細かさや、表情などを感じとるための「手でみる土かべ」である。そして、展示ケースの中には7種の実土（採掘されたままの土の塊）と、44種にも及ぶ土の粉の、見本が、薬品壺に詰められている。土の見本は、主に中部地方を中心に、北は秋田、南は沖縄、そして、中国のものまで集められている。赤、茶、黄、あさぎなどに大別できる土も、ひとつとして同じ色はない。それらをもとに作られたのが、「手でみるつちかべ」である。子どもたちがその壁を触っていくのは、その色の多様性にひかれてなのか、ただ、そこにある壁として触ろうとするのかは、判らない。しかし、どんな理由であれ、土の感触が子どもたちの手を通して伝わっていく。

「手でみる土かべ」の反対がわには、直径40センチの白い半球体が二つ、黒い台に置かれている。近づいてみると、白い小さな薄い板が寄せ集まって球体を成している。細胞が分裂していくようにも見える。そして、ひとつは光の点が七色に変化し、ひとつは、光の点がゆっくりと点いたり、消えたりしている。この球体の表面を覆う白く薄い板は、「ペーパー・セラミック」という新素材で、パルプと土を混ぜて作られたものである。それは、焼かれる前は、紙のように柔らかく薄い。そして、焼成することで、硬くそして、光を通すほどさらに薄くなる。その透過性とグラス・ファイバーなどを利用したものが、「陶・輝・球」なのである。粘土だけでは、1ミリ以下の薄い陶板を作ることは、大変困難なことである。しかし、現代の技術と紙漉きの技術がそれを可能にしたのである。

「陶・輝・球」の奥には、高さ約3メートル、直径70センチの木と竹で出来た巨大な鳥籠のようなものがある。籠の中には、鳥はいないが「チン、チロ、カン、コン、キン、……」と音が聞こえてく





る。籠の中には、さまざまな形に焼き締められた陶板が吊り下げられている。陶板の間を透明のパイプが、真っ直ぐ上まで通っている。そして、パイプの中から小さな木球が吹き上げられ、陶板の上を転がり落ちていく。一枚、一枚の陶板の大きさ、形の違いで微妙に音色が異なっている。子どもたちは、吹き上げられていく木球を目で追い掛け、陶板を転がる音を聞いて、木球の軌跡を耳で感じる。時々、失速しそうな木球に、「がんばれ、がんばれ！」と声援を送る子どももいる。子どもたちは、触覚を通してだけでなく視覚と聴覚を通して土を体験していくのである。

## II. 体験

展示は、子どもたちが、制作活動によりスムーズに入っていくための、制作疑似体験の場である。それらは、4月から7月までに作られた、子どもたちと指導員たちの土の作品が環境設定となっている。そして、今回の展示作品は、さまざまな様態のテラコッタ粘土が中心になって制作されている。同じ土が、方法やテーマを変えていくことで、どのように変化していくか、展示作品を見て、触って、聞いていくことで体験できる。そして、他の土とテラコッタ粘土が掛け合わされていくことで、土の持つ表情の豊かさも見ることができる。

そして、「ブロックであそぼう」のコーナーで子どもたちは、テラコッタ粘土を素焼きして作った何千枚もの小さな煉瓦を、手にすることができる。子どもたちは、いろいろな大きさと形の煉瓦を一段一段積み上げていく。小さな子どもの腰の高さほどもある建物を作って、まるで自分が小人の国のガリバーにでもなったかのように、建物の周りをねり歩く小学生。四角く煉瓦で囲いを作り、自分だけの部屋を想像して、椅子や家具などを組み立てていく女の子。ただ、ひとつの煉瓦を握りしめて、煉瓦の感触を楽しんでいる幼児。ひとりひとり、小さなブロックとの付き合い方は違っていても、時間を忘れて土と火が作り出した陶の感触を楽しんでいる。きっと、土には子どもを飽きさせない不思議な力が含まれているのだろう。



## III. 制作

造形スタジオでの制作活動は、子どもたちが、展示・体験の場で出会った未知なもの、不思議なもの、美しいものへの憧れによって動機付けられた時点から、すでに始まっている。それは、展示している数多くの友達の作品や、「手でみる土かべ」の土の感触や、「陶・輝・球」の陶を通した光などを体験することであったり、あるいは、指導員の「粘土でつくってみる。」などの誘いかけの言葉であったりする。子どもたちが「何かを作ろうとする力」は展示や体験の場で



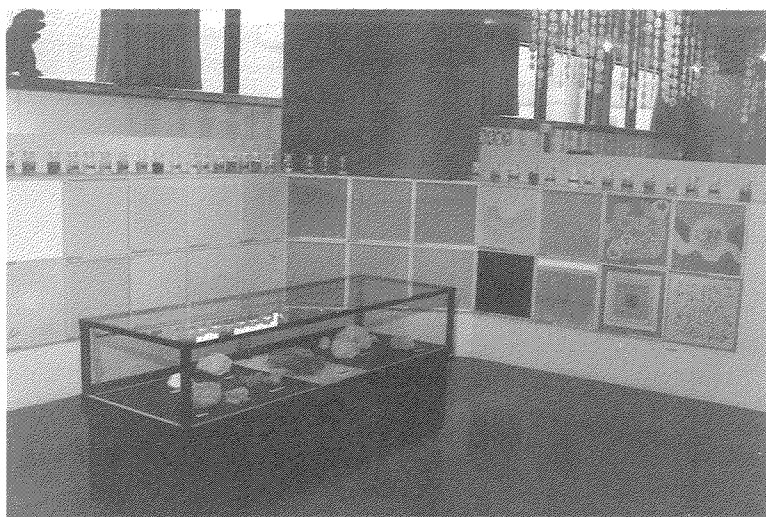
増幅される。そして、子どもの生活背景や造形体験によって作り出されるものは変化していく。たとえば、同じ形のものを見て、同じものを作ったとしても、そこには、ひとりひとり異なったイメージが存在している。「何か」というイメージと、「作る」＝土に触れるという現実とが絡み合い、子どもたちは作品を作る。そして出来上がった作品は、すぐに展示される。子どもひとりひとりのイメージから生まれた作品が集合体となることによって、おはなしでも作れそうなファンタジーの世界が生まれてくる。

#### 特別展示・体験コーナー「手でみる土かべ」

壁は、人間が生活をする空間を仕切るためのものである。壁を作る素材や方法を変えることにより、音や熱、風、雨などを遮断したり反射したり、その目的に応じて使い分けができる。

日本でも古くから草壁や板壁などがあったが、土壁は、寺院建築とともに中国、朝鮮半島から伝えられたと言われている。そして、桃山から江戸時代に考案された新しいタイプの建築「草庵茶室」の中で、土壁の上塗に色土を使う技術が発達した。赤褐色の大阪土や茶褐色の聚楽土などをはじめ、土の色は採れる地方でさまざまである。今でも茶室に使う黄土を京壁と呼ぶのは、茶室の発祥が京都にあるからである。

造形スタジオの「手でみる土かべ」では、日本各地の土を使い、練り合わせる材料や塗る方法を変えることで、さまざまな土壁の表情を見ることができる。数多くの人工の色彩の中で暮らしている子どもたちには、おとなしい色合いの土壁は目に止まりづらいものであるかもしれない。44種の土の見本と24枚の土壁の見本が伝えてくれることは、左官職人の技術の見事さや、土の表情の多様性だけではない。私たちが生活の中で見る壁は本来、私たち人間の足元にあるということ、コンクリートを剥がせばそこにあるもの、土だということに気づかせてくれるのだ。



「手でみる土かべ」制作：榎本新吉氏



### プログラム1 惑星をつくろう

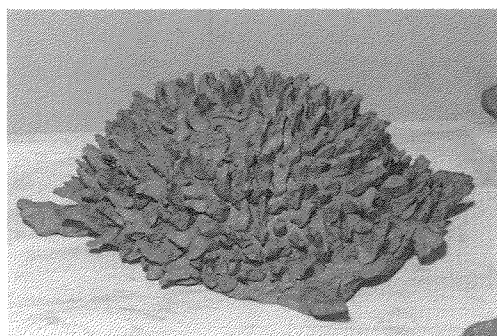
自然が生み出す形は、限らない広がりを持っている。私たちは、身の回りの形に目を奪われがちであるが、大きなスケールで眺めてみた時、地球という惑星もまた魅力溢れる形をしている。地球の表面に刻まれた岩石や地層、褶曲や断層などは、驚くほど多様な表情を持っている。それらは、まるで生きもののようにも見える。そして今では、宇宙から送られてくる衛星からの映像により、惑星全体の表情まで克明に知ることができるようになった。このプログラムは、そういった視覚的体験を基に子どもが自らの手で新しい惑星を粘土で作っていく。

子どもたちは、3～5キロの粘土の塊を転がし、大きな球を作る。小さな動物などを作る粘土細工に慣れている子どもたちも、大きな塊の粘土できれいな球体を作ることは大変である。しかし、指先だけでなく体全体を使い、大きな粘土の塊を転がすことで、土の持つ柔らかさ、冷たさなどの感触が子どもたちに刺激を与える。土に対する抵抗が始まる。転がしていくだけでは球にならず、掌で叩き、最後には両手で抱え込みながら作る子どももいる。そして、指で押し、つまみ、引っ搔いて惑星を作っていく。指の押し跡が湖となり、引っ搔いた線が川や砂漠の風紋となる。そして、つまんだ盛り上がり山となり、そのつながりが山脈となる。そこには惑星の持つ生命力が表現されている。



### プログラム2 かぶせてペタン—なんにみえるかな—

平たく切りとった粘土の板を、引っ繰り返したステンレスのサラダ・ボールの上にそっと乗せると、それだけで半球体ができあがる。掌で優しく叩いて、しっかりとボールの形を取る。子どもたちは、その半球体からなにを作ろうかと、しきりに考える。地球、島、冠、動物など、さまざまなものが浮かんでくる。粘土の紐をたくさん作り、森にしたり、粘土の表面を引っ搔き道を作り、車や家を作っていく子どももいる。わずかに直径18センチの半球体の小宇宙の世界に、子どもたちは入り込み、その住人となる。そして、半球体の形が子どもたちのイメージを広げ、さらに、粘土の何にでも形を変えていく柔らかさが、イメージの手助けをしてくれる。子どもたちの作ったものは、モノトーンの粘土の世界でありながら、なぜか色を感じさせてくれる。子どもたちは、半球体をした土のキャンパスの上に思い思いの形を作り出す土のアーティストになる。

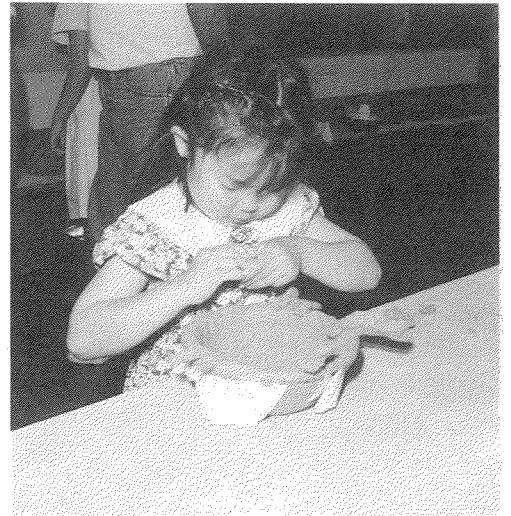




### プログラム3 かぶせてペッタンー顔をつくらうー

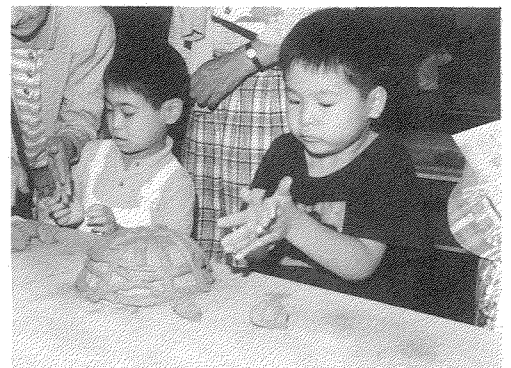
焼き物というと、生活用品の器や茶碗や皿を思い浮かべがちである。しかし、造形スタジオで作るものは、食卓で使う皿ではなく、皿の形をした顔なのである。

平たく切りとった粘土の板を、晒布を敷いたサラダ・ボールの内側に落とす。手で押しあて、余分な粘土を取り去る。粘土の紐を巻き回したり、手捻りでなくても、簡単に皿の形が出来上がる。それから、その中に粘土で作った紐や球で、目、鼻、口、耳と、顔を形作っていく。マイナスの形をした皿の内側から、さまざまな顔が飛び出してくる。今にも天に届かんとばかりに伸びる鼻、波のうねりのような眉、ドーナツの環のような目、子どもたちの作り出す顔は、まるで自分たちの気持ちを表しているかのように、表情豊かである。



### プログラム4 リング・リング・リングⅡ

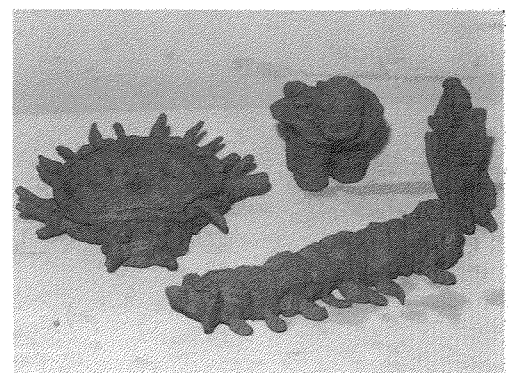
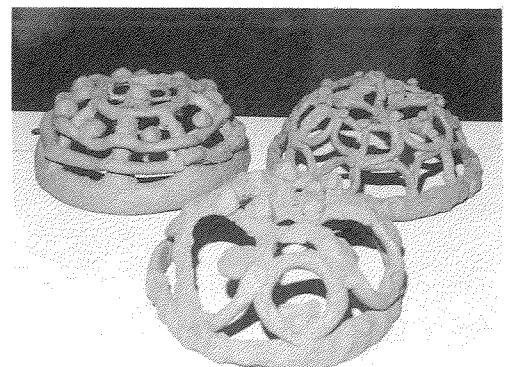
このプログラムは、昨年実施した「リング・リング・リング」の支持体となるパイプをサラダ・ボールに変えてみた。支持体をサラダ・ボールにすることで、子どもたちが作りだしたものの形態は自然と器に近似してくる。しかし、器を作ろうと粘土の紐を転がし始める子どもは少ない。子どもたちは、半球体のボールの上に何を作ろうか、粘土の紐をどう繋いで模様にしようかと必死である。粘土のリングが繋がって、王冠や、塔、顔、恐竜などになっていく。少し乾燥した頃に、指導員が手早くサラダ・ボールを抜き取ると、器の形をしたオブジェに光が通っていく。基本となる形は、みんな同じ半球体のサラダ・ボールひとつであるが、そこから子どもたちが作りだした形にはひとつとして同じものはない。



### プログラム5 デコボコ虫をつくらう

自然の中に住む生物を見ると、その形、色などの多さには驚かされる。虫もそんな地球の住人のひとりである。そして、何よりも固体数の多さでは、他の生物を圧倒している。つまり、それだけ日常の中で子どもとの出会いも多いのである。肉眼でその生態をつぶさに観察したファーブルを引き合いに出さずとも、子どもにとって、馴染みは深い生物である。

子どもたちは、手にした粘土の塊を丸めたり、伸ばしたりして、虫の胴体、足、触角などを作っていく。デコボコとさまざまな模様を持ったビニールの床材で、粘土を海苔巻きのように巻いて、デコボコ模様をうつし採ったり、貝殻のスタンプを粘土に押し当てたり、爪や指で模様をつけたり、方法はさまざまである。粘土の塊からつまみ出して形を作り、あとから模様をつける子どももいる。出来上がった虫たちは、展示台の上に集合する。何度も何度も粘土を転が



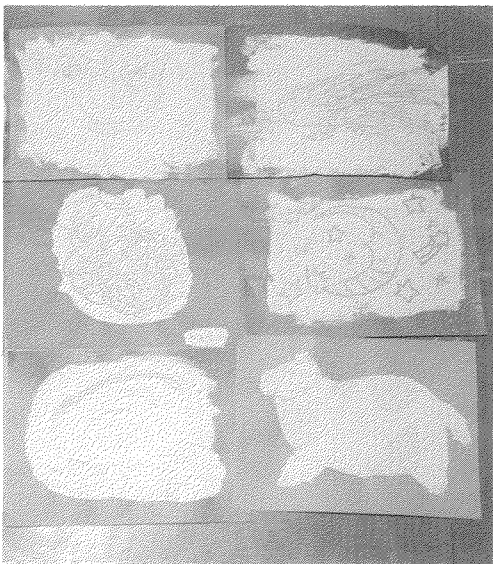


し、乾燥しはじめて、ひびわれかけた足を持つ虫、粘土を握り締めた指跡がそのまま模様となっている虫。大事なことは、出来上がった形が整っていることでも、虫の知識が豊富なことでもない。土と子どもたちが共有した時間が、その虫たちの模様から伺えることが大切なのである。

#### プログラム6 ドロ・ドロイング

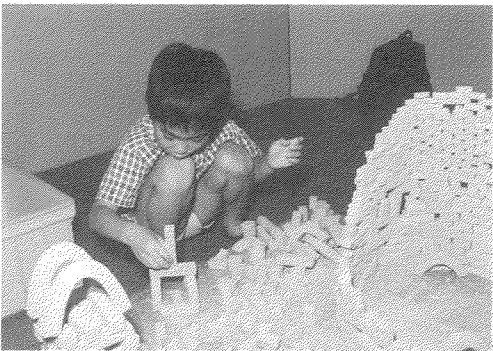
古くから日本では「土」や「泥」というと、汚いとか、野暮ったいことの代名詞として捉えられがちである。ましてや、泥遊びなど経験することの少ない都会の子どもたちにとっては、親の「洋服が汚れます。」といった言葉などが「土」に対するイメージを汚いものと決定しがちである。しかし、土の持つ感触には言葉では言い表せない魅力が潜んでいる。それは、生来人間が土と深い関わりを持ってきた証でもある。

このプログラムでは、そんな泥状の土を積極的に使ってみた。ドロドロの水で溶いた土を筆でラシャ紙に薄くのばす。泥ののばしかたで現れてくるテクスチャーもひとりひとり変わってくる。塗った泥を竹ひご、粘土べら、櫛で引っ搔いて、絵や模様を描く。引っ搔いた跡から下地のラシャ紙の色が浮かび出てくる。土の色と紙の色のコントラストが形をハッキリと見せてくれる。大地に棒切れで落書きをするように、子どもたちの手の動きはダイナミックである。子どもは、いつの間にか土と遊ぶ術をひとりで見つけ出している。



#### プログラム7 ブロックであそぼう

1×2×4センチ、2×2×4センチを始めとして、いろいろな大きさに素焼きされたテラコッタ粘土のブロックが山積みになっている。素焼きのブロックには、木のブロックのすべすべした感触の良さや香りはない。しかし、大地の色とでもいうような鮮烈なオレンジ色が子どもたちを引きつける。そして、直方体だけでなく、四角い煉瓦に窓をくりぬいて作られた門や窓、チェスの駒のように作られた生き物たちの形の柔らかさや面白さに、子どもたちは戸惑うことなくブロックに手を伸ばす。手にしたブロックはザラザラしてはいるが、思いのほか暖かく、優しく感じられる。それは、素焼きされ硬く変容した粘土とはいえ、ひとつひとつのブロックの中にもミクロの空気の間隙があるからかもしれない。子どもたちは、手にしたブロックに、陶の温度、湿度、色、感触を体験する。



## プログラム8 カリカリ・アート

対象：小学生1年生～

そんなに遠くない昔、今の大人が子どもだった頃には、木や土で作られた塀や壁が数多く見られた。そして、その表面に釘や石で落書きをし、怒られても懲りずに何度も繰り返し遊んだ経験のある大人は少なくないはずである。子どもたちにとって、それは自然の素材を使い、大人たちが作ってくれた大きなキャンバスに思えるからだろう。

造形スタジオには、鋸でベニヤ板などに平らに塗られ、乾燥した土のパネルが用意されている。子どもたちは、その硬く、小さなひび割れが無数に入った土の上を釘で引っ搔いて虫を描いていく。カリカリ、ガリガリと子どもたちは、力強く硬い土に線を刻み込んでいく。手が痛くなるのも忘れるほど、無心に描いていく子どももいる。気がつくとも、自分の掘り起こした土の粉が、描いた虫を覆っている。化石の発掘でもするように、小さな藁箒で土の粉をはらいのける。土に刻まれた虫の形が現れてくる。書き終えたら、その上に紙を置き、クレヨンでフロッターージュをしていく。4、5色のクレヨンを重ねて塗ると、まるで新発見された南の極彩色の虫のようにうつしだされる。

## プログラム9 クレイ・クッキー

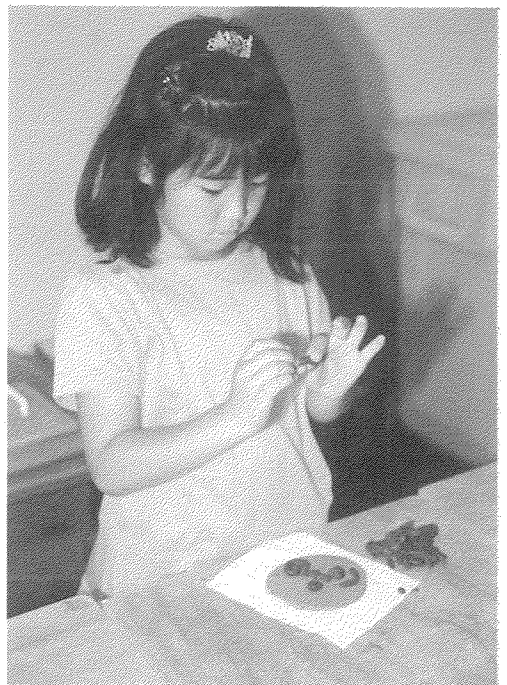
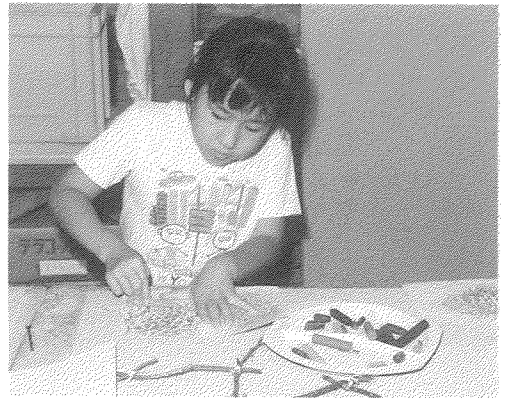
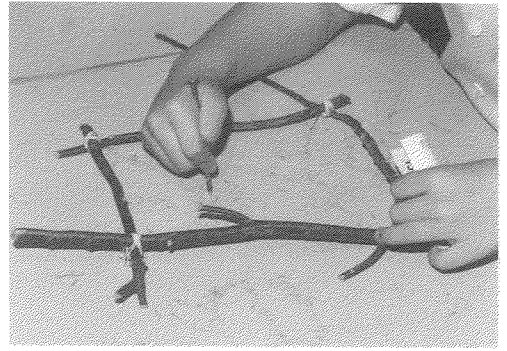
対象：小学校1年生～

天井から吊り下げられた、大小さまざまな丸い陶板を見ると、茶色の地には白い線で、白い地には茶色の線で模様が描かれている。これは、信楽粘土とテラコッタ粘土でそれぞれ丸い球にし、プレス用のベニヤ板で押し当てて不定形の粘土の板を作る。そして、それぞれの粘土の板の上に、お互いに違う色の粘土で絵や模様を描くようにして、もう一度プレスして作ったものである。押し当てる力が均一で強ければ強いほど、タブロー（板絵）に描かれた絵のように平らになる。それは、まるで可愛い絵模様のついたクッキーのようである。食べるクッキーはオーブンで焼かれて、美味しく食べられるが、造形スタジオのクッキーは、1200度以上の高い温度で焼かれ、紐で繫げられて陶の簾に変身する。

## プログラム10 土に絵をかこう

対象：小学校1年生～

私たちが使っている絵の具も元は岩を細かく砕いて作ったものである。日本画で使う絵の具を岩絵の具と言ったり、絵の具のことを顔料というのは、素材が岩、鉱物にあるからである。つまり、土と絵の具は兄弟のようなものなのである。





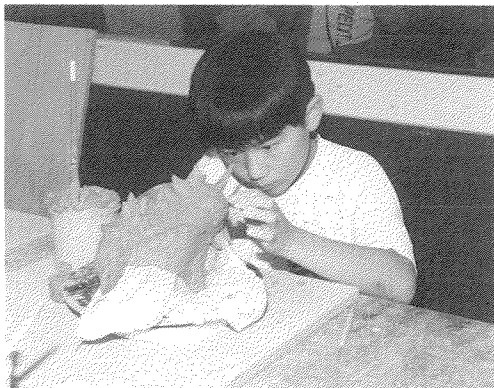
子どもたちは、粉状の土に水と藁を混ぜ合わせ、四角く切った段ボール板に塗り付ける。掌で土の感触を楽しんでいるかのように、飽きずに混ぜ合わせる。乾燥したときにひび割れないようにするためのつなぎの藁が土の質感に優しさを与える。下地を作った上に赤、青、白、の色土で絵を描く。筆で塗ったり、ナイフで引っ掻いたり木の葉の形をステンシルしたり、色土はいろいろな方法で下地の土にのせられていく。

### プログラム11 あなあきブロック

対象：小学生3年生～



5キロ位の粘土の塊を両手で持ち上げ、20センチ位の高さから粘土板に落とす。粘土の面を変えて繰り返し粘土板に落とす。粘土を落とす高さを少しずつ低くして、形を整えていく。不定型だった粘土の塊は、徐々に直方体になっていく。子どもたちは、直方体の粘土の底面を除いた面に一筆書きのように模様や絵を描く。四隅の柱になる部分は残すようにする。掻き出しべらを使って、引っ掻いた模様の中の粘土を繰り出していく。最初に描いた形が丸でも四角でも、子どもが掘っていく方向や大きさで、穴の形は変わっていく。五つの面の模様の穴が中央で通じる。あるいは、一度も交わることなく反対の面にまで行き当たる。子どもたちは、その直方体の中に計画性と偶然性が絡み合った有機的な空間を作り出す。

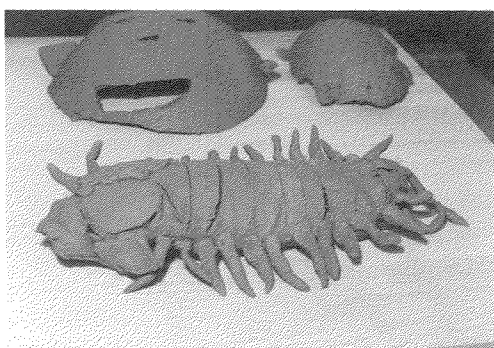


### プログラム12 なんにみえるかな

対象：小学生3年生～

自然の中にあるいろいろなものの形を見てみると、そのフォルムは、どこか互いに似た部分がある。例えば、雲の形や山の形を見て、動物にたとえて名前をつけ、それが俗称などになっている。また、日本には、昔から全く材質や大きさの違うものの、特徴的な部分を取り出し、なぞらえるという「見立て」の考えがある。ここでは、河原にあるさまざまな形をした石を使い、子どもたちが想像力を働かせ、その形をなにかに見立てていく。

子どもたちは、自然が作り出した大小さまざまな石の中から、気に入った形の石をひとつ選ぶ。ボールのように丸いものもあれば、へちまやきゅうりのように長細いものもある。石に晒布を当て、厚さ5ミリの薄く切り取った粘土の板をかぶせる。粘土の板を掌で包むようにして、石の形を型取っていく。掌には、粘土の感触と石の持つ量感が同時に伝わってくる。粘土の板は厚すぎると、土の感触しか伝わらないし、薄すぎると、粘土はちぎれてしまう。掌に残った感触から、子どもたちのイメージが広がっていく。粘土の紐、球、板などが石の形をした粘土につけられていく。いつの間にか、石は



昆虫、象、兎、恐竜、魚、鯨や飛行船にまで変身してしまう。自然が作り出した形がイメージを与え、そして、自然が作り出した粘土の可塑性が子どもたちに力を貸しているのである。

### プログラム13 クレイ・フラッグ

対象：小学校3年生～

土には可塑性の他に、ものを包み隠すという隠蔽する力がある。子どもたちが泥遊びのなかで顔や体に泥を塗って、変身したりできるのは、土に接着力や隠蔽力が存在するからである。そして、染色の世界には、土に含まれた鉄分を生かした泥染があるが、ここでは、土の接着力と隠蔽力を使い、色が染み込むのを防ぐ、防染方法で旗を作った。

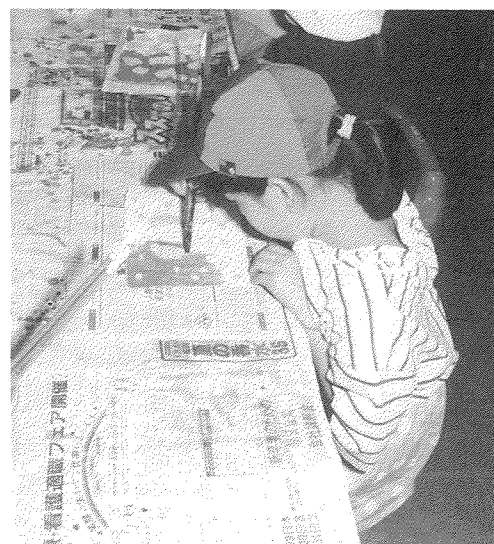
一枚の布の半分に、チューブに入れた泥で絵や模様を描く。チューブを押す力の加減で、線は太くもなり、細くもなる。描き押えたら、布を半分に折り、何も描かれていない面に泥を押し当て、よく食い込ませる。布を開いてみると、少し太くなった泥の線が左右対象になって現れる。ドライヤーを使って泥を乾燥させ、赤、青、緑から一色だけ絵の具を選び染める。そして、もう一度乾燥させ、水で泥を洗い落とす。泥の乗っていた絵模様が淡い黄土色で現れる。染めた色と少しだけ土を感じさせる淡い黄土色のコントラストが不思議に響き合う。竹の柄に紙の飾りを付けて、染め上げた旗を接着する。自分だけの「クレイ・フラッグ」の完成である。

### プログラム14 クレイ・プリント

対象：小学校3年生～

粘土には、どんな形のものでうつしとる力がある。そして、版画技法は版を使って、ものを写し取る方法である。粘土という素材と版画技法という方法を組み合わせたのが、クレイ・プリントである。

子どもたちは、プレス用の板で押し当てて作った不定型の粘土の板の表面に貝殻や機械工具などで型押しをして、模様を作る。デコボコの粘土のタイルが版となる。型押しした粘土の上に直接絵の具を筆で塗る。何色かの絵の具をスポイトや竹ひごでさらに粘土の上に垂らす。湿らせた版画用紙を粘土の上に当て、プレス板で押し当てる。押し当てる力の強さの違いが、直接紙の上に形と色として残る。粘土に押し当てられ、へこみとなったものの形は、紙に押し当てられることで二次元の世界に生まれ変わる。



## 造形教室

### プログラムA：クレイ・アート・ボックス

対象：小学校3年生～／制作日数：2日間

陶芸の技法には、何年もかけて初めて形になるような高度な方法がたくさんある。それは、先人の智恵と習練によって作られたものである。しかし、ここでは粘土をこねる、切り取る、摘む、丸める、延ばす、型押しする、搾りだす等といった陶芸の基本的な技法を地面、家、木、動物といった具体的なものを作っていくことによって、自然に楽しく覚えることが出来る。

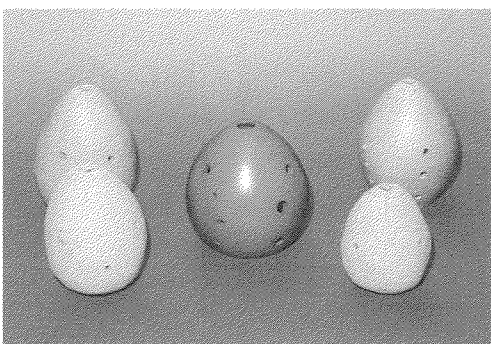
10センチ角に切った厚さ1センチのテラコッタ粘土のタイルが、大地となる。大地には、信楽粘土の象嵌細工で道や公園などに区切られていく。そして、硝子のビーズが彩りを添える。次に、テラコッタ粘土のブロックを積み重ねて、家を作る。粘土のブロックは、捻じったり、曲げられて、変幻自在に家の姿を変えていく。木と動物を作ると、もうそこは、子どもだけの小さな世界となる。「クレイ・アート・ボックス」は、さまざまな焼き物の標本箱であると同時に、陶の箱庭なのである。

### プログラムB：つくってならそう！土笛・ケン

対象：小学校3年生～／制作日数：2日間

中国では、先史時代以来、音孔のある中空の笛が作られている。それを陶埙(ケン)あるいは燠(クン)と呼んでいる。日本でも弥生時代のものと思われる陶埙(ケン)が発掘されている。土笛というとすぐに、オカリナや鳩笛を思い浮かべる。しかし、ここにある土笛・ケンは、大人の掌に入るくらいの卵形をしている。そして、吹き口もオカリナと違い、卵のてっぺんの尖った部分をナイフで切ったように1センチ程の穴と、音階を出すための少し小さな穴が七つ開いているだけである。ビール瓶を吹くときのように吹き口に唇をあてる。音が出るまで何度となく唇をあてる角度を変えてみる。「フォー、フォー」と、大地から、遠い空から、海の底から、しみ出てくるように大雄々しい響きである。

子どもたちがろくろを引いたり、手びねりで中空の笛を作ることは大変困難なことである。ここでは、事前に作っておいた大中小の卵形の石膏型を使う。たたら板を使って薄く切った粘土の板で卵形の石膏を少しずつ包んでいく。一度に包み込むと石膏と粘土の間に空気が入り込んでしまう。包み込んだら、糸で半分に切り石膏型を取り出し、もう一度“のた”で接着する。はじめは、歪んだ卵しか作れなかった子どもも3個、4個、と作っていく内にしっかりとした卵



形が作れだす。同じ形のものしか作っていないのに、土の持つ人間との親和性のせいであろうか、飽きてしまう子どもはあまりいない。

低温で焼成した土笛を持って子どもたちは、音楽スタジオで音楽の専門スタッフと共に吹くためのワークショップを行う。このプログラムは、音楽事業部と共同で試行錯誤を重ねたもので、このような試みは、初めてのものである。

### プログラムC：土の家をつくろう

対象：小学校3年生～／制作日数：2日間

家というと、日本では木造建築の家が一番馴染み深いものであろう。しかし、先史時代より世界中どこでも作られていた竪穴式住居を始め、ヨーロッパでは、石や煉瓦を積み重ねた家、布や樹皮で作ったテント、北極では、氷のドームの家など、暮らす場所や時代、習慣などによって、その材料や方法はさまざまである。そして、どんな素材よりも昔から、今も建築素材として使われているのが土である。このプログラムでは、穴を掘ったり、土を盛って提や塀を築いたり、人間が自然の地形を利用し住処を作ってきたように、家を建てる大地から作りはじめる。

45センチ角のベニヤ板と同じ大きさの金網を大地の心材に使う。金網は、子どもの力でも簡単に曲げることが出来る。また、金網を砂袋やステンレス・ボールなどにのせてしゅもく槌で叩くと、平らだった金網は叩いたところが山の形となる。子どもたちは、思っていたよりもいろいろな形が作れることがわかり、自分の納得がいく形が出来るまで何度も何度も、叩いては曲げ叩いては延ばして「大地」を作る。形作られた金網は、ベニヤ板に打ちつけられる。釘で打ちつけられることで、金網はしっかりとした大地となっていく。さらに、家になる部分を同じ金網で作る。なかには、金網を打ちおえてから、何となく物足りなさを感じ、また金網を曲げ打ちつける子どももいる。それから、粉状の土と藁、水などを混ぜ合わせ、金網の大地に塗り付けていく。子どもたちは、藁や土を篩にかけ粗い、細かいものに選別して使う。ボールの器に入れた材料を素手でかき混ぜる。土と水の粒子が繋がり、藁も水分を含んでくる。ザラザラとした感触が少しずつ、スベスベした感触となり粘り気のあるネバネバした感触へと変化していく。その土を塗り付け、何度もへらで土の表面を滑らかにする子ども、藁の粗さをそのまま使う子ども、表現はさまざまである。そして、一度乾燥させてから、色土や砂、小石を使い、畑、道、塀、井戸、門などを作っていく。子どもたちは、環境をも作りだす建築家となる。

